

消費者庁以前の問題ですよ

中村 靖彦 | Written by Yasuhiko Nakamura

福田総理が消費者庁を新しく設けることに意欲的だと言う。結構だと思えますよ。とりわけ食の安全・安心に関して、消費者の信頼感を損ねる事件が頻発しているので、一元的に取り仕切る行政機関が必要だとの思い、よく分かりますし、異議を差し挟むつもりはありません。

ただですね、このところの食品産業の不祥事、加工から外食までのさまざまな事件を見ていて、私には消費者庁以前の問題じゃないかとの気持ちが強くなる。あるいは、これが安全・安心問題の核心なかもしれないとさえ思う。そのことをここに書きます。

何故、不祥事が続くのか。ここ数年、私の頭を常に離れなかった疑問である。不正が明るみに出ると、メディアはこぞって取材に殺到し、活字や映像で報道する。新聞やテレビで、その事件が連日伝えられているのに、それでも不祥事が後を絶たない。ウチの会社は大丈夫か、後ろ指を指されるようなことはしてないだろうな “ などという内部の点検はないのだろうか。 ” ないのだろうな、多分 “ と私は、そのことを不思議に思っていた。

何故なのか、自分で考え、人にも聞いてみた。しかし、分らなかった。ところがこの頃、ようやくそのヒントみたいなものを

日本人の社会行動から感じることができた。食と直接関係ない日本人の日常からの感触である。

電車に乗る。 ” 優先席付近では携帯電話の電源をお切り下さい。それ以外の場所ではマナーモードに設定して通話のご遠慮下さい。 ” このような音声によるメッセージが流れる。こんな虚しいメッセージはありません。お年寄りなどの優先席には、若者がドンと腰を下ろして携帯のメールの文章を作っている。電車のドアが開いた時に、若者が我先に座席に向かう理由が、この頃、私に分かってきた。メールの文章を作るのに、立っているよりは座っている方が便利だからである。

” 優先席付近では云々 ” のメッセージが何と空々しいことか。メッセージが必要だとするなら、 ” 優先席は、本当にその席を必要としている人にお譲り下さい ” でしょ。

しかし、どちらにしても同じこと。携帯でメールの文章を作ったり、あるいは送信していたりする人は知らん顔。注意するメッセージには何の関心も払わない。

さらに別の事例。酒酔い運転の厳罰化が決まって、特に市民の範となるべき自治体の職員などには、長となる人が、その趣旨を徹底した。それでも酒気帯びや酒酔い運転はなくならない。意志

が弱いということもあるのだろうが、要するに指示には関心を払わないのである。自分のことと考えないのである。

そこで私は納得しました。食品産業の人たちも、同業の不祥事には何の注意も払っていません。人ごとだったのです。つまり、もはや日本人の人格は崩壊しているのです。

料理の老舗「船場吉兆」における客の食べ残しを使い回していた事件には驚きました。同じ店が前に違反した、牛肉の産地を偽装した事件より、はるかに恐ろしい。きれいに残っていた料理だけを、また別の客に出したとか。もう一度焼き直し、揚げ直しをしてからだったという言い訳は、一流の料理店のシェフの言葉とも思えない。きれいに見えても、客の唾ぐらひは飛んでいるでしょうし、焼き直しをして丹精込めて作った料理の味が保てるのでしょうか。

けれども、この事件の報道だって、もしかして同じような不正をしているかもしれない人の胸には響いていない。

何故、食の安全・安心に関わる不祥事が続くのか。もう一つの原因は、消費者の甘さです。やはり老舗が犯した表示違反に、有名な「赤福」と北海道の「白い恋人」の事件がある。赤と白の違反事件などと言われた。両方の企業は、一定期間の業務停止を命じられて、お菓子を売ることができなかった。

ところが、みそぎが済んだとして、販売再開の日、信じられないほどの数の客が店頭に並んだ。“久しぶりの懐かしい味だ”などという客の感想がテレビや新聞で伝えられた。それほど大きな違反事件ではなかった、という事情もあるだろう。誰もお腹をこわしたりはしていない。だけど、いささか甘すぎませんか。何も、特定の企業を個人的に糾弾するつもりはない。両者に私は何の恨みもない。ただ社会正義の観点から言っているのです。

たとえば、そんなに大きくない不正でも、謹慎期間が過ぎたら“やっぱり美味しいわ”などと言いながら、ブランド名が入った袋を下げて歩く神経はおかしい。これでは、不祥事は何時までた

つてもなくならないと思う。

この行動は、先の食品産業の性格と同じで日本人に固有のものではないか。だから、消費者庁を新しく設ける以前の問題だと私は思う。しかし、実は食の安全・安心について考える時の底流にあることでもあるし、核心であるとも言える。

さらに、いま述べた甘さに関連して消費者側の対応で気になることがある。

一連の事件の中で、秋田比内地鶏の偽装は、不正は不正だが、私は思わず笑ってしまった。銘柄鶏である比内地鶏の燻製と称して、廃鶏の肉を売っていた事件である。廃鶏ですよ。卵を産まなくなつて淘汰される鶏だから、肉は固い。私が笑ってしまったのは、偽装の袋に書かれていた次の表示です。“この肉は固いですが、歯ごたえのあるのは比内地鶏の特徴です”と書いてあった。偽装の策士の苦心の作でしょう。そして、消費者はまんまと騙された。騙す方が悪いのはもちろんです。だけど、騙される方にも一半の責任があるような気もする。みんなもう少し勉強しようよ、と言いたくなる。

こちらは消費者側の問題。企業側の問題も合わせて考えると、これらは消費者庁を作ったとしても解決できそうにない。新しい行政機関を設けるのはいいが、日本人の人格について考察するのが先なのではないでしょうか。

中村 靖彦

(なかむら・やすひこ)

東京農業大学客員教授、女子栄養大学客員教授。1935年宮城県出身。59年東北大学文学部卒業後、NHKに入り、教育局農事部などを経て解説委員に就任。農業・食糧問題を担当するとともに米価審議会委員など要職を歴任した後、明治大学客員教授を経て、2004年から現職。主な著書は、『狂牛病 人類への警鐘』(岩波新書)、『遺伝子組み換え食品を検証する』(日本放送出版協会)など。